

寄稿

## ボブ・バトラー博士の微笑(ほほえみ)

### 紀伊國猷三

Kenzo Kiikuni

笹川記念保健協力財団理事長

ボブ(ボブ・ケンゾーと呼び合っていました)があの世界に行ってしまったとは信じられませんが、お互いの年齢を考えると仕方ないのかもしれない。

ボブとは、1985年頃に日本で知り合いました。確か日本社会事業大学の関連であったと思います。日野原重明先生と始めた財団が高齢者のケアの問題を検討していましたので、その為だったと思います。

ハイライトの一つは、1988年11月のニューヨークでの“Who is Responsible for My Old Age”シンポジウムです。これは後にボブと私の編集でSpringerから出版されています。その序文でボブは、彼の思想である“Active and Productive Aging”を熱っぽく語っています。それには個人の責務、家族の責務、公的、私的な社会の責務があるとの彼の考えは、現在でも通じる思想だと

思います。

このシンポジウムは、個人の責務ではロザリン・カーター、家族の責務ではベティ・フリーダン、樋口恵子、袖井孝子、公的私的な社会の責務では坂東真理子、連合の加藤敏幸、ペッパー上院議員、NHKの行天良雄(以上敬称略)を含むそうそうたるメンバーで、熱のこもった会議となりました。これは第一にボブの幅広い人脈と構想力によるものでしょう。開会前日に、セントラルパーク・ウェストの彼のアパートで、奥様のあたたかいおもてなしを受けたことも忘れられません。

何よりも彼は決して怒った顔を見せず、いつも穏やかな微笑を浮かべていました。写真にも見られるように、強い信念を基本に、常に柔和な人柄を示す彼の微笑を忘れることができません。ご冥福をお祈り致します。



1988年、ニューヨークにて  
右から博士、ロザリン・カーター夫人、筆者